

平成16年度 山形市教育研究所 情報教育推進に係る調査研究  
児童・生徒用メールアカウントの活用に関する実践事例報告

情報教育推進調査研究 研究員

工 藤 歩（山形市立第五中学校教諭）

## 1 はじめに

本校は、「コロラド州ボルダーの学生との交流活動をしてはいただけないだろうか」との依頼を山形市より受け、本校第2学年選択英語の受講生徒を対象にALTの協力を得ながら「山形市教育情報ネットワーク」を活用し活動を進めることになった。

16年末よりその準備に入り、現在進められている授業実践までの概要を以下紹介することとする。

## 2 アカウントの管理について

### (1) 課題

「総合的な学習」との関わりで、生徒がメールのやりとりをする場面（アカウントが必要になる場面）が増えてきていることは、多くの学校で感じていることと思われる。本校も同様であるが、これまで他校・他団体とのメールのやりとりは必ずしも積極的に行われていなかった。

原因はいくつか考えられるが、もっとも大きな原因は「アカウントの管理」にあると思われる。つまり、学校の教育活動の中で外部とメールによるやりとりを行うことに伴う事前指導や操作指導、マナー指導の他に「1対1」のメールのやりとりをするに要する教師側のチェック機能への不安である。

発達段階を考えると中学では「1対1」のメール交換までを習得させたい。しかし、教師のチェックなしで自由にメールをさせるのは指導として十分とは考えられない。必要に応じてアドバイスを与えることの繰り返しで確かな知識と技術が生徒の身に付けなければならない。つまり、「1対1」のメールのやりとりが可能で、加えて教師の十分なチェック機能を働かせられ

る環境を満たすことが課題と考えられる。

### (2) 対応

市内中学校には「スクールイントラパック3」というグループウェアシステムが導入されている。このシステムを効果的に使うことにより、既述した課題が解決され、本校での交流活動を支えている。

このシステムの特徴は以下の通りである。

- ① 1つのアカウントで運用可能である。
- ② 生徒機から送信されるメールには、そのメールアドレスの前に自動的に個別番号がつくき判別ができる。

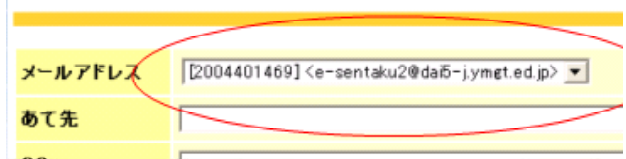


図 個別番号がついたメールアドレス

- ③ 返信メールは自動的にその個別番号をあたかもアカウントの一部のように判別し、その生徒機に返信される。
- ④ 不適切な単語や表現を事前にシステムに登録しておくことで、メール送信時にチェック機能が自動的に働き、送信が遮断される。
- ⑤ 教師が内容の事前チェックを行うことができる。

### 3 おわりに

今年度初めて行った経験を生かし、来年度以降は更に多くの場面での活用が十分可能なものとならえるようになった。TV会議システムとあわせ、生徒の視野を広げ、コミュニケーションの機会を提供することのできるツールとして、多くの学習場面において効果的に活用していきたいと考えている。